自ら問い、自ら導く学生たち

小学生の時に交通事故に遭い、手術室の看護師さんにやさしくしてもらった経験から看護師に興味を持つようになったという加藤さん。「これからの看護師は、より専門性の高い新しい役割を求められるようになるはず。ケアのスペシャリストとしての実践や、システム管理看護学、教育、研究など、あらゆることに興味があります」と意欲的だ。

Risako Kato

加藤里沙子さん

医学部保健衛生学科看護学専攻４年

大学3年の時から「英国で緩和ケアを学びたい」という夢を膨らませてきた医学部保健衛生学科看護学専攻4年の加藤里沙子さん。3年次修了後に1年間休学し、官民協同による支援事業「トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ」に応募。研修先を選ぶところから出願まで、留学準備を多くの人の協力を得ながら自分で行い、夢を実現させた。

「緩和ケア発祥の地である英国には、疾患の種類や病期などにかかわらず患者や家族の苦痛を取り除くという、私の理想とするケアの理念があります」

英国では、ホスピスでの研修とボランティア活動に6カ月間参加。その後、別のホスピスで2週間の実習を行い、さらに家庭医の診療同行、家庭医対象の研修に参加した。

「『死ぬときに苦しむのでは』と不安を訴える患者さんに、看護師は、眠るように亡くなる人が多いと伝えた上で今後起こりうる症状について丁寧に説明していました。そばにいた妻が涙ぐむと、患者さんが『泣くな』と止めました。その時、看護師が『愛する人をもうすぐ失うかもしれないときに、泣くのは当然でしょう』と語りかけると、夫婦はお互い涙ぐみ、手を握り合いました。この会話がとても印象的で、緩和ケアはどういうものなのかを考え直すきっかけになりました」

しかし、帰国後の加藤さんは、卒業後の進路に緩和ケアを選ばなかった。医学部附属病院の外科病棟で急性期における看護をしっかりと学びたいのだという。

「緩和ケアの価値観を学ぶという目標を掲げて留学しました。実際に英国に行き、症状コントロール、葛藤を紐解くコミュケーションスキルなど学ぶべき課題が明確になりました。まず私自身が一人ひとりの患者さんとしっかり向き合える実力を身につけたいです」

4年次の現在、卒業研究の傍ら、トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ1期生として、プレゼンや雑誌などを通じた留学の成果の発信にも精力的に取り組んでいる。自分が学んだことを後輩に伝えたいという思いも強く、「挑戦する気持ちをなくさず、留学という選択肢も考えてみてほしい」とエールを送った。B

夢だった留学を実現し自分の進むべき道が明らかになりました

英国留学中に印象的だったのは、出会った看護師たちが、仕事以外の時間をとても充実させていたこと。「彼女たちを見て、看護では専門知識以外の教養も大切なのだと知り、帰国後は歴史や文学なども積極的に学ぶようにしています」と話す加藤さん。何事にも全力で取り組む加藤さんらしく、登山や自転車などアクティブな趣味も充実させたいという。